

特発性造血障害に関する調査研究

研究分担者 黒川 峰夫 東京大学医学部附属病院 教授

研究要旨

低リスク群MDSの治療方法は様々あり、治療方法の選択や予後について現状把握のために、アンケートによる全国調査実施を計画する。

A. 研究目的

2012年にMDSの予後予測指標として、改訂国際予後予測指標(IPSS-R)が提唱された。IPSS-Rでは、それ以前に使用されたIPSSに更に染色体異常を細分化した指標を加えた指標で治療選択に重要な指標として用いられ始めているが、現在もIPSSに基づく治療選択も行われている。MDSの低リスク群はサイトカイン製剤、メチル化阻害剤、輸血、鉄キレート療法、5q-症候群に対するレナリドミドなど様々な治療選択がある群である。本研究では低リスク群とIPSS-R中間型リスク群のMDSにおいて、臨床像・現在・予後の治療選択の実情を把握することによって、より適正化された治療選択を目指すことを目的とする。

B. 研究方法

低リスク群MDSの治療方法の選択や予後について現状把握のために、アンケートによる全国調査実施を計画する。後方視的に各MDS症例に対し、IPSS、IPSS-Rによるリスク分類を行ない、輸血依存の有無、血清LDH、血清フェリチン値、PNH型血球の有無や治療選択、予後（全生存、AMLへの進展率）との関係を調べる。

（倫理面への配慮）

介入を伴わない疫学的な研究に該当する。現在全国調査においては倫理委員会申請準備である。予備調査として施行した単施設における後方視解析については東大病院倫理委員会の承認を得ている。

C. 研究結果

本年度は単施設における予備調査として、2012年1月～2017年3月までに骨髄異形成症候群と診断された79症例に対して、治療選択・全生存率、AMLへの進展率を解析した。IPSS-Rにおけるvery low/ low群では、約半数が輸血も含めて未治療であった。治療選択は輸血・赤血球造血刺激因子製剤・免疫抑制剤やその併用等が行われた。予備調査結果に基づき、全国アンケート調査に向け、項目を作成し内容の検討を実施した。

D. 考察

予備調査では少数例の解析であり、低リスク

MDSにおける最適化された治療選択を行う為、多施設の現状を把握することが望ましい。

E. 結論

上記結果に基づいて全国調査を行う準備を開始しており調査票・項目について検討した。多施設の疫学調査に向けて準備中である。

F. 健康危険情報

該当しない。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む。）

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

